

柴田 賢さんを偲んで

富樫 茂子¹⁾



2001年3月 名古屋大学にて

柴田 賢 元地質調査所首席研究官・地殻化学部長が、2020年2月28日満87歳で
ご逝去されました。

柴田さんは日本における地質年代学の草分けの一人として、長きにわたり、地質学の
発展のために尽くされてきました。1956年11月に地質調査所入所後、1960年に英国
ケンブリッジ大学に留学し、K-Ar地質年代測定法について研鑽を積みました。帰国後、
地質調査所にK-Ar法による地質年代測定実験室を整備し、日本列島の基盤を形成する
花崗岩類、変成岩類のK-Ar年代測定を実施しました。さらに、1967-1969年にはカナ
ダ地質調査所においてRb-Sr地質年代測定法の研究に従事し、帰国後、Rb-Sr法による地
質年代測定実験室の整備に努め、地質調査所がわが国における地質年代測定研究のセン
ターとなる基礎をつくりました。

1978年10月には技術部地球化学課長となり、つくばへの移転を進めました。1988
年には地質調査所の初代首席研究官、1989年から新設の地殻化学部長として地質調査所
における地球化学分野の研究組織の体制を整備しました。1993年には母校の名古屋大学
理学部教授となり、地球惑星科学教室において、岩石学と地球化学の教育・研究に務める
とともに、年代測定資料研究センターのタンデム型加速器質量分析装置の導入にも貢献
しました。1996年から名古屋文理短期大学教授として名古屋文理大学の創設に貢献し、
1999年から名古屋文理大学教授を務めました。

日本列島の地質を構成する主要な岩石や地層の年代データを出すことに多大の精力をそ
そぎ、技官の内海 茂さん、中川忠夫さん、青山秀喜さんらの協力を得て、共同研究者の
宇都浩三さんや松本哲一さん、内外の地質研究者と共に地質調査所在職中に出した地質年

1) 産総研 地質調査総合センター地質情報研究部門 名誉リサーチャー

代データは 2,100 を越え、それを公表した学術論文は 200 編を越えています。なかでも、中部日本の飛騨変成岩である上麻生礫岩中に、それまでわが国の基盤岩類には存在が確認されていなかった先カンブリア時代の年代(約 20 億年前)の片麻岩を発見し、その標本は今も地質標本館に展示されています。

これらの業績に対し、1983 年には日本地質学会賞、1988 年には通商産業省研究業務優秀者賞、1993 年には日本地質学会小藤賞、2007 年に日本岩石鉱物鉱床学会渡邊萬次郎賞を受賞しています。

柴田さん自身が執筆された「地質調査所における地質年代測定研究」が AIST 研究秘話の一つとして、工業技術院および産総研の OB 組織である「産工会」の WEB ページに掲載されており、留学時や地質調査所での研究の様子がよくわかります。

私は、つくば移転後は課長である柴田さんとは近くの机で仕事をしていました。少し研究分野が異なり、ご一緒に研究をする機会はありませんでしたが、柴田さんの研究者として、研究リーダーとしての活動を間近で知ることができたのは貴重な経験でした。

印象に残っているのは、1982 年 6 月に日光市で開催された第 5 回地球年代学・宇宙年代学・同位体地質学国際会議での事務局長としての仕事ぶりです。得意の英語だけでなく、海外の人的ネットワークを活かし、世界を代表する多くの研究者を招き、日本人より外国人の出席者が多く、当時の国際会議として画期的な成功を収めました。この会議は私にとっては初めての国際会議であり、刺激の多いものでした。

当時、私は、炭素 14 法の実験室の立ち上げと、学生時代から続けていた火山の研究、2 人の子供の出産育児などの両立で悩みながら仕事をしていました。かなり無茶なこともしていたと思いますが、柴田さんは暖かく見守って下さいました。炭素 14 法の研究が一区切りついた頃、地質調査所での共同利用の蛍光 X 線分析装置の担当の機会をくださり、その後の私の研究の展開のきっかけとなり、今でも感謝しています。きっと私の悩みを理解されていたと思います。

「大急ぎで」が口癖で日中はテキパキと仕事をして、夕方 6 時頃には退庁しておられました。しかし、あれだけの論文を書いておられたのですから、ご帰宅後も仕事されていたのではと想像しています。一方で釣りが趣味とのことで、そのコントラストを不思議に思っていたのですが、バランスを取っておられたかもしれません。

この追悼文を執筆するにあたって、奥様に手紙を差し上げたところ、眠るように穏やかな最期だったとのことでした。心からご冥福をお祈りいたします。